福井県から北米地域への移住・移民：旧足羽郡出身者のシアトルでの移民生活史に焦点を当てて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, 恭代 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/21

［研究論文］

福井県から北米地域への移住・移民
―旧足羽郡出身者のシアトルでの移民生活史に焦点を当てて―

小松　恭代

はじめに

日本人のハワイやアメリカ、カナダ（以後北米地域）への移住・移民[1)]は開国や明治維新を契機に本格的に始まった。福井県からの渡航者では、1867（慶応３）年に福井藩最初の留学生としてアメリカに派遣され、東部のラトガーズ大学に学んだ日下部太郎がよく知られている。日下部については、彼と親交を結んだW・E・グリフィスが後に教師として福井藩に招聘された経緯もあり、『新日本の先駆者　日下部太郎』（永井 1930）や『よみがえる心のかけ橋　日下部太郎/ W・E・グリフィス』（福井市立郷土歴史博物館編 1982）のように、いくつかの書籍が書かれてきた。日下部は病により志半ばで亡くなったが、ラトガーズ大学に保存されている史料をもとに、彼のアメリカでの留学生活に関する研究も進んでいる[2)]。一方、福井県の一般の人々の移住・移民に関する書籍としては、南カリフォルニアに移住した人々で組織された福井県人会が1953（昭和28）年に発行した『南加福井縣人五十年史』（以後『五十年史』）がある。この書には、県人会の歴代の主要会員の略歴やこれまでの活動記録、創立当時からの会員の田辺常吉[3)]による県人会の回想記等が収録されている。論考に関しては、河原典史が「カナダ・ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者」（河原 2014）において、1910（明治43）年の雪崩の犠牲となった三方郡出身者のカナダ行きの経緯[4)]と、日本人の契約移民をカナダの鉄道工事に斡旋した福井市出身の後藤佐織の北米での経歴[5)]を論じている。しかし、福井県の一般の人々がどのような目的で海外に渡り、どのように困難を克服して渡航地で生活を築いていったのか等､個人の移住･移民にかかわる人生の記録はこれまでに書かれていないようである。

本稿では、まず先行研究や福井県の旅券交付のデータをもとに、19世紀末から20世紀初頭における福井県からの北米地域への移住・移民の概要を述べ、次に筆者が共通の友人を通じて知り合った日系三世、スーザン・ヤマムラの祖父、荒木仁作のアメリカでの人生に焦点を当てる。荒木は旧足羽郡（現福井市）出身で、1906（明治39）年、20歳の時にアメリカに渡り、シアトルで花卉栽培に従事し成功を収めた。ヤマムラは2014（平成26）年に回想録、*Camp 1942*

受付日　2020.10.26
受理日　2020.12.28
所　属　学術教養センター

and the Rest of My Life（以後*Camp*）を自費出版しており、その中で荒木の人生を自分とのかかわりで描いている。また、主にシアトルの一世の体験をもとに書かれた日系移民の体験史、『北米百年桜』（伊藤 1969）に荒木の体験談が収録されている。これら２冊の書籍とヤマムラの*Discover Nikkei* [6] への投稿記事、及び筆者のヤマムラへのインタビュー[7] に依拠しながら荒木のアメリカでの人生をたどるとともに、福井の暮らしや文化がどのように保持されていたのかを検証する。

１．福井県から北米地域へ

日系移民の歴史では、1868（明治元）年に約150人の日本人がサトウキビ農園の契約移民としてハワイに渡り、これを契機に日本人のハワイへの移住・移民が盛んになったことが知られている[8]。その後、アラスカを含むアメリカ本土やカナダにも移住・移民が広がっていった。1885（明治18）年以降、ハワイには20万人、アメリカ本土には18万人の日本人が上陸した（タカキ1996, 47）。しかし、日本人移民に対する排斥運動の高まりから、アメリカでは1924（大正13）年に一般に「排日移民法」と呼ばれる法律[9] が制定され、日本人の移民としての入国が全面的に禁止された。カナダにおいても1928（大正17）年以降日本人の移民が制限された[10]。こうした歴史的事実をふまえて、19世紀末から20世紀初頭における福井県から北米地域への移住・移民を大まかに見ていく。

福井県から北米地域への移住・移民の始まりが正確には何年であったのかはわかっていないが、『福井県三方郡是』（以後『三方郡是』）には、「本郡の海外移民は……明治初年の頃……布哇に初めて渡航したるに起因」と記されている（福井県三方郡役所編 1916, 315）。この記述から、福井県の人々も早い時期に海外に関心をもち、明治の初期にはすでにハワイに渡航していたことがわかる。

『福井県統計書』[11] に「海外旅券下附」の項目表が加わるのは1900（明治33）年である。これは福井県からの海外渡航者の増加を反映している。この年旅券が下附されたのは269人であり、そのうちの260人がアメリカ（本土）を渡航先としている（残りの９人の渡航先の内訳は、清と韓が各３、ロシアが２、イギリスとフランスが各１である）[12]。この表には前年、前々年の人数も記載されており、1899（明治32）年は272人中、アメリカ行きが155人、ハワイが107人であり、1898（明治31）年は64人中、アメリカ行きが61人となっている[13]。近隣国への渡航者は少数であり、多くがハワイやアメリカに渡ったことが『福井県統計書』のデータからわかる。また、「海外旅券下附」の表に渡航先としてカナダが加わるのは1904（明治37）年である。この年は１人のみであるが、1907（明治40）年にはカナダを渡航先とした156人に旅券が下附されている。

『福井県統計書』には郡市別の「海外旅券下附」人数も記載されている。どの年においても

三方郡（現美浜町と旧三方町）が突出して多い。たとえば、福井県の1902（明治35）年の旅券下附数214件のうち、三方128、敦賀24、遠敷16、福井16、坂井10であり、三方郡が他の郡市に比べて非常に多いことがわかる。この理由の一つとして、河原は当地の経済的基盤の問題を指摘している（河原 2014, 200-201）。当時の三方郡では養蚕にかかわる農家が多かったが、生糸の価格は景気変動に左右されやすく、当地の養蚕業は明治の後半に衰退した。人々は外貨獲得、つまり出稼ぎ目的で太平洋を渡ったのである。このことは『三方郡誌（復刻版）』（初版は1911（明治44）年発行）において、「本郡は福井県に於いて、海外出稼人の最も多き郡」と記され、海外渡航者を「海外出稼人」と呼んでいることからも明らかである（美浜町教育委員会編 1972, 243）。

この地域には北米地域への移住・移民を奨励し、斡旋する人たちがいた。三方郡耳村で区長を務め、村の経済の発展のために移民事業に尽力した吉岡與左衛門はその先駆者である。渡航手続きの申請に自ら東奔西走して村民を助け、1892（明治25）年には旅費の問題への対策として協同組合を設置し、定期的に北米に移民を送り出した（美浜町誌編纂委員会編 2010, 406）。移民が村に戻ると自宅に呼んで報告会を開き、「三方郡人の渡米熱」を煽ってはさらに渡航者を増やしていったようである（南加福井県人会編 1953, 3）。南西郷村の村長だった今村忠兵衛も村の次男三男の働き口に苦心し、一つの打開策としてアメリカへの移民を人々に勧めた。周囲を説得し、苦労の末にようやく1899（明治32）年に村人をアメリカに送出することができた。これを契機に南西郷村では渡米者が増加し、アメリカ村と呼ばれるほどになったと言う（堀口編 1952, 42-43）。南加福井県人会のあるメンバーは、吉岡と今村の名前を挙げて、「このお二人こそ吾ら等在米福井県人をして渡航に尽力された恩人である」と述べている（南加福井県人会編 1953, 3）。また、1870（明治３年）に耳村の名望家に生まれ、のちに衆議院議員となった河崎清も移住・移民事業に積極的にかかわった。1898（明治31）年に若狭商業銀行の河原市支店専務取締役となる一方で、1906（明治39）年に熊本移民合資会社の代理人となり、地域の人々を契約移民として北米地域に送り出した（美浜町史編纂委員会編 2010, 216-217）。

福井市出身の後藤左織がかかわった東京移民合資会社も斡旋を行った。1907（明治40）年にはこの会社を通じて154人の福井県出身者がカナダへ契約移民として渡り、そのうちの約半数の72人が三方郡出身であった（河原 2014, 200）。カナダでは主に鉄道の保線作業に従事した。また、中国移民合資会社[14]が耳村に出張所を置いて、ハワイへの移民を募集・

資料１
布哇（ハワイ）渡航の募集・斡旋の新聞広告
（『若州』明治 38 年８月 12 日）

斡旋している。この会社は、例えば、1905（明治38）年の８月９日から９月１日の期間、『若州』新聞（隔日紙）[15] に、「布哇渡航の申込を受く」と題する広告[16] を計７回出している（資料１）。人々のハワイへの関心は高かったらしく、同年９月23日の『若州』新聞には、ハワイ渡航願を申請中であった30余人の三方郡の人々のうち、21人に知事から旅券が下附されたとの記事が掲載されている。ハワイのサトウキビ農場やアメリカ、カナダの鉱山や鉄道の工事現場など、北米地域は安価な労働力を求めており、海外で働くことを望む三方郡の人々に移民会社は渡航の斡旋をしていたのである。

『三方郡是』には、1914（大正３）年当時、三方郡全体で約1,000人が渡航しており、地元に年間で10万円以上を送金していたと書かれている（316）。「日本円貨幣価値計算機」[17] によれば、1914（大正３）年の10万円は、2017（平成29）年の約３億３千万円に相当するようである。三方郡の経済基盤が人々の海外出稼ぎによって支えられていた一面がうかがえる。これまで三方郡の北米地域への移住・移民に関する背景を述べてきたが、福井県の他の郡市の移住・移民については現在のところ史料の入手ができておらず、今後の課題としたい。

人々は渡航先で数年働き、その後福井県の地元に戻ったが、中にはその地への定住を決意する人もいた。既婚者は家族を呼び寄せ、独身男性は写真結婚等を通じて妻を娶り、家族を形成していった。1932（昭和７）年10月27日付けの『大阪朝日新聞』福井版の記事[18] によると、同年10月15日時点の福井県からの海外移住者の合計は1,541人であり、北米680人、南米495人、カナダ101人、ハワイ92人、満州80人、などとなっている[19]（「北米」とはアメリカ本土を指すと考えられる）。前述したが、アメリカやカナダではそれぞれ、1924（大正13）年、1928（大正17）年に法律によって日本からの移民が禁止／制限されており、『福井県統計書』においても1924年以降、「海外旅券下附」数の記載はない。したがって、この新聞記事が示す北米地域への移住者とは1924年以前に渡航した移民一世とその子孫であると考えられる。アメリカ本土のみについて言えば、1930（昭和５）年の日本人の数は138,834人である（タカキ 1996, 167）。上記の新聞記事によると、同時期にアメリカ本土（新聞の表記では「北米」）に住んでいた福井県出身者とその子孫は680人であり、これは全体の約0.5％に過ぎない。他県に比べれば、福井県からのアメリカ本土への移住・移民の数は非常に少なかったのである[20]。北米地域全体への移住・移民に関しても同様のことが言えると思われる。

日系移民の歴史では、出身県ごとに県人会が組織され、移民の物心両面にわたる支援母体となっていたことが知られている[21]。前述したが、南カリフォルニア、つまりロサンゼルス周辺に移住した福井県出身者も1910（明治43）年に南加福井県人会を創立している。『五十年史』によると、会員は三方郡出身者が圧倒的多数ではあるものの、敦賀郡や遠敷郡、越前や三国の出身者もいたようである。職業としては農業が多いが、庭園業の他、野菜果物店やレストランの経営者もいた。県人会は様々な行事や会を開いて会員の親睦をはかる場となっていただけで

はなく、仕事や住居の紹介から経済的な支援まで助け合いと協力のネットワークとして機能していたようだ。『五十年史』には、県人会が「貯金部を設けて、その会員に金融して県人発展に貢献」したとも書かれている（29）。しかも、会員の福井県人への貢献は海を越えて行われていた。1948（昭和23）年の福井地震の際には、県人会はすぐさま救済対策会議を開き、義援金を集めて福井県に物資を送っている。県人会からの善意と支援に対し、当時の福井県知事は感謝状を送っている。

南加福井県人会の人々は、約50年間のアメリカでの生活を振り返って『五十年史』を出版できるほどに生活の安定と心のゆとりを得ていたと言えるだろう。次に、実際に移住・移民者はどのような人生を送っていたのか、ある福井県出身者を例にアメリカでの生活をたどってみる。

２．アメリカへの移住・移民

前述したように、『大阪朝日新聞』福井版の記事によると、1932（昭和７）年には680人の福井県出身の移民一世とその子孫がアメリカ本土で暮らしていた。そのうちの一人であった荒木仁作の暮らしや人生についてこれから述べていきたい。荒木は筆者が共通の友人を通じて知り合ったスーザン・ヤマムラの祖父である。彼女は荒木の初孫であり、三世代同居の生活の中で荒木に非常に愛されて育った。筆者が知り合った頃、ヤマムラは荒木家の歴史を含めた自身の人生の回想録、*Camp*を2014（平成26）年に上梓した後、引き続き荒木家の歴史、特に祖父母の日本の実家やアメリカへの移住・移民の経緯を調査中であった。筆者が日本の実家の調査を少し手伝ったことが縁となり、ヤマムラとの交友が続いている。2017（平成29）年春にヤマムラの住むアリゾナ州ツーソンに滞在した時には５日間ほど自宅にホームステイさせてもらい、祖父である荒木の人生について話を聞くことができた。

ヤマムラが心から慕って「*Jichan*」と呼ぶ荒木は、1886年（明治19）年に旧足羽郡の農家に生まれ、1906（明治39）年、20歳の時にアメリカのシアトルに渡った。主にシアトルに在住する一世の体験談から構築された日系移民の体験史、『北米百年桜』の中で、荒木は自らの渡航を次のように語っている。

> 私は一九〇六年（明治三十九年）二月二十一日、カナダのバンクーバー経由でシアトルに到着した。渡米手続中、私は福井県立福井農業学校時代の同級生……と横浜の検疫所[22]で偶然会った。私は渡米前に、敦賀の松原小学校へ奉職、尋常三年生を三時間と高等科三、四年の理科、体操、農業をうけもっていたが、たまたま、大阪の新聞をよむとアメリカの記事が毎日でていた。それがキッカケで渡米を決意したのである。船は英国船「アゼニアン号」（三千トン）で、二月の太平洋はシケて、食堂にいって食事をとることができないほどゆれた。私は空腹にたえかねて、支那人船員の売りにき

た焼芋を買って食べた。（伊藤 1969, 66）

「大阪の新聞をよむとアメリカの記事が毎日でていた」と言っているが、明治30年代中頃から40年代にかけて日本国内に渡米への関心が高まり、渡米を奨励する書籍が多数出版され、新聞や雑誌にも渡米情報が掲載された[23]。『大阪毎日新聞』には頻繁に渡米関連記事が掲載され、読者からの反響も大きかったようである（立川 1986, 383-417）。例えば、1902（明治35）年９月には「カリフォルニア州農業一班」、1903（明治36）年１～６月には「在米成功の日本人」、1905（明治38）年１～２月には「テキサス州日本人の米作」の記事が掲載された（立川 1986, 389）。推察に過ぎないが、荒木の言う「大阪の新聞」とは『大阪毎日新聞』のことであり[24]、この新聞の上記のような「アメリカの記事」が荒木に影響を与え、渡米のきっかけとなったのではないかと思われる。

荒木の渡米の理由として、彼の孫娘ヤマムラの*Camp* には、「お金を稼いで父の借金返済を援助するため」と書かれている（Yamamura 2014, 4）。当時日本社会ではアメリカに対し、「手っ取り早く稼げる出稼ぎの地」「金のなる木のある国」というイメージが構築されていた（立川 1986, 403）。荒木が読んでいた新聞記事もアメリカについて同様のイメージで書かれていたと思われる。勤務先の小学校は敦賀郡にあって前述した三方郡に隣接しており、渡米経験者からのお金に関するうわさ話も聞いていたと推察される。しかも、荒木は農業学校の卒業生であり、アメリカの高賃金[25] だけではなく、新聞記事に掲載されたアメリカの農業に大いに関心を持ったと思われる。荒木が渡米する前年の1905（明治38）年の『福井県統計書』によると、この年足羽郡で旅券を下附された３人のうちの１人が「農業」を渡航目的としており、これは荒木ではないかと推察される。ヤマムラが書いているように、荒木は「アメリカには成功への無限の可能性がある」と信じ（Yamamura 2014, 4）、横浜を出航し、数週間後にバンクーバーを経由してワシントン州、シアトルに着いたのだった。

しかし、現実は甘くなかった。数ヵ月後に到着した兄とともに、約３年の間、より良い仕事、より快適な労働環境を求めて移動しなければならなかった。ワシントン州ではシアトル、ヤキマ、タコマ、サンファン島などで働いたが、カナダへも何度も出かけたようである。タコマやヤキマでは奥地の宿泊所に寝泊りしながら伐木や木の切り出しの作業に従事し、サンファン島ではガードナー（gardener）になり庭仕事を行った。ワシントン州からモンタナ州に渡り、グレート・ノーザン鉄道で働いたこともある。荒木の仕事は主に枕木用の木の切り出しだった。宿泊所の環境は悪く、夜ベッドに寝ていると南京虫に悩まされ、食事もひどかった。朝食は日本からの労働者が交代で作ることになっており、荒木はここでご飯の炊き方を覚えたようだ。初めのうちは上手く炊けずに「半煮えめしをつくり、みんなから仕事へ出られないと大目玉をくった」こともあった（伊藤 1969, 410）。農家の生まれではあるものの、渡米前は教員をして

いたのであり、荒木にとって木の切り出しの仕事はきつかったと思われる。ヤマムラによると、彼は身長約165センチで肩幅が広く、がっしりとした体つきだったが、「伐木や鉄道での労働のためにますます筋骨たくましい体格」になったようである[26]（Yamamura 2014, 9）。

一方、荒木は町中でペドラーとして働いたこともあった。ペドラー（peddler）は「行商人」と訳されるが、日本人移民の体験談によると、朝早くに野菜や果物を市場で仕入れ、得意先を回って注文を取り、それらの品物を届けるのがペドラーの仕事だったようである。荒木はこの仕事について次のように述べている。

> 私がペドラーをしていた頃、早朝五時から夜遅くまで、一日、十二、三時間働いた。四、五階のアパートを毎日上下して、得る収入は、馬の費用と雇い人（一日一ドル）の給料と、自分の生活費でいっぱいだった。私のお客は貧困者ばかりで、こんな区域ではとてもダメだと思って廃業した（伊藤 1969, 1000-1001）。

ペドラーは担当区域が決められていた。白人地区を担当した者の中には売上げが多く、商売として成功した一世もいたようだ。しかし、荒木の場合は担当区域に恵まれず、アパートの階段を日に何度も上り下りしなければならず、その上馬や雇い人に経費がかかり、ペドラーを長く続けることができなかったのである。

荒木はいろいろな仕事に携わったようであるが、どのようにしてそれらの仕事を見つけたのだろうか。日系移民の歴史では、鉄道業、林業、鉱山業、農業などの産業に移民労働者を送り込んだ請負業者の存在が明らかになっている[27]。荒木も全部ではないにしても、請負業者から仕事を得ていたと思われる。請負業者は労働者を供給しただけではなく、労務管理も行った。荒木がモンタナ州のグレート・ノーザン鉄道で働いたことは前述したが、この会社に移民労働者を斡旋し、現場で彼らを監督したのはシアトルの東洋貿易会社だった。ボスと呼ばれた東洋貿易の請負人が鉄道会社と移民の仲介役となり、移民の仕事や宿泊所での生活を管理した。彼らは鉄道会社から賃金を得ていたのではなく、担当した移民労働者から毎月上前をはねていた。グレート・ノーザン鉄道での荒木の日収は「十時間で一ドル」だったが（伊藤 1969, 410）、東洋貿易のボスに１日50セントの宿泊費と５セントの手数料、月に１ドルの事務所費と50セントの病院費を支払わなければならなかった（鶴谷 1977, 107-108）。月に18ドルがボスに徴収されることになり、休みなく働いても荒木の手元には月に12ドルぐらいしか残らなかったと思われる。当時の為替レートでは１ドルは約２円であり（鶴谷 1977, 113）、日本円にして約24円、現在の貨幣価値に換算すると毎月の手取りは約８万円だったことになる[28]。

1909（明治42）年、シアトルの白人男性専用の社交クラブ、レニア倶楽部でガードナーとして働いていた荒木に転機が訪れる。解雇された従業員に代わってエンジニアに抜擢されたので

ある。給与は月60ドル（現在の貨幣価値では約28万円）にはね上がった。食事がつき、その上クリスマスには１ヶ月分のボーナスが出た。これはこの職場で日本人が手にできる賃金の最高額であった[29)]。いかに荒木が勤勉で、ヤマムラの言葉を使えば、「能力があり、信頼できる」人物として評価されていたかがわかる出来事である（Yamamura 2014, 13）。この職により荒木は十分な金額を貯蓄することが可能となり、やがてシアトルに近いサウス・パークに土地を購入する[30)]。そして、レニア倶楽部での仕事の前後や休日にその土地を耕して農地に変え、野菜を育て、シアトルのパイク・プレイス・マーケットに売りに出かけた。荒木は農業を基盤にビジネスを始めたのである。1913（大正２）年には岩手県出身のマサと結婚し、翌年には長男（ヤマムラの父）が誕生した[31)]。1920（大正９年）までには、サウス･パークの地所に家を建て、レニア倶楽部でのエンジニアの仕事を続けながら､マサとともに野菜や果物の栽培･販売を行った。荒木は農業学校で学び、卒業後は小学校で農業を教えていた。福井県で身につけた農業の知識や経験をもとに、シアトルの気候風土に合い、市場で売れる農産物を工夫して栽培したのである。

その後、1930年代（昭和５年～）にかけて、荒木は敷地内にグリーンハウス（温室）を建て、野菜だけではなく花卉栽培にも力を注いでいった。兄の家族も加わり、数人のフィリピン人労働者も雇っていた。パイク・プレイス・マーケットでは野菜販売の他に花屋も開店し、順調にビジネスを伸ばしていった。荒木はこの間もレニア倶楽部でのエンジニアの仕事を続けており、非常に多忙な生活を送っていたと推察されるが、兼業が可能だったのは妻のマサに負うところが大きかったと思われる。グリーンハウスで農業をしていた一世女性の体験談によれば、グリーンハウスの温度調節や作物への水遣りなど一日中仕事がたくさんあったからである（伊藤 1969, 348）。マサは朝早くに起きて荒木とともにグリーンハウスで働き、家族に朝食を用意し、子供の世話をしたことだろう。そして、荒木がレニア倶楽部で働いている間、パイク・プレイス・マーケットで野菜や花を売り、それが終わればグリーンハウスで作業をした。荒木の帰宅後は再び共に働き、夕食の準備をし、夕食後は家事や子供の世話をして床に就くのは真夜中になったことだろう。こうした生活がほぼ毎日続いたと思われる。ヤマムラが述べているように、荒木夫婦においてはマサが主導権を握るか、または同等のパートナーとして働くことで、荒木の農業ビジネスは成功したのである（Yamamura 2014, 17）。

1939（昭和14）年には、長男が結婚してサウス・パークの家に同居し、グリーンハウスを手伝うようになった。この頃、荒木は長年勤めたレニア倶楽部を退職し、農業に専念している。荒木の農業ビジネスは後継者を得て拡大していったようだ。歴史家のユウジ・イチオカは一世を「敵対的な土地で生き残るために苦闘した」人々と呼んでいる（イチオカ 1992, 1）。荒木の場合も1906（明治39）年に渡米して以来､様々な困難に直面したことだろう。それは1909（明治42）年にレニア倶楽部でエンジニアの職を得るまでの数年間、職を転々としなければならな

かった事実に明らかである。特に人種差別による影響は大きかったことだろう。土地の所有やビジネス上の契約において、「帰化不能外国人」の日本人は法律上の制約を受けたからである。しかし、荒木は誠実さと勤勉さを忘れずに努力を続け、妻とともにアメリカにホームを建設し、ビジネスを成功させ、「アメリカン・ドリームを達成した」のであった（Yamamura 2014, 29）。

1941（昭和16）年、日本軍の真珠湾攻撃後の日米開戦は荒木に衝撃を与えただけではなく、人生を変える出来事となった。一世の多くが体験したように、苦労の末に実現した彼のアメリカン・ドリームは戦争によって砕け散ってしまったのである。ヤマムラによると、荒木は日本人であるために法的にも社会的にも一層不安定な状況に追い込まれ、まだ50台半ばであったにもかかわらず、サウス・パークの土地・建物の所有権やビジネスの権利をアメリカ国籍の長男に譲渡せざるを得なくなった。それまでも名目上の所有者は長男であったが、実質的に不動産を管理し、ビジネス上のすべての実権を握っていたのは荒木であった。ビジネスの主導権も長男の手に移行した。このことは荒木がゼロから築いたアメリカでの人生すべてを放棄したことに等しく、ヤマムラが述べる通り、「苦痛に満ちた過程」であったと思われる（Yamamura 2014, 33）。

1942（昭和17）年には、ルーズベルト大統領の行政命令により、太平洋沿岸に住む日本人とその子孫が「敵性外国人」として強制収容所に送られることになった[32]。荒木一家はまずはワシントン州のキャンプ・ハーモニー仮収容所に、約４ヶ月後にはアイダホ州のミニドカ収容所に収監された。収容所は有刺鉄線に囲まれ、監視塔には銃を持った衛兵がいた。砂漠地に建設されていたため、夏は気温が35度を超え、冬は氷点下になり、砂嵐が頻繁に起こった。荒木とマサは長男家族とは別のバラックに入れられ、ここで丸３年を過ごさなければならなかった。ヤマムラによると、荒木は忙しかったグリーンハウスの仕事を離れ、家族のための家具作り等をしながらのんびりと暮らしていたらしい。手先が器用な上に芸術的センスのあった荒木は螺鈿細工の家具まで製作したそうである。

戦後は長男家族とともにサウス・パークに戻り、長男の主導のもとでグリーンハウスの農業ビジネスを再開した。日系家族の中には強制収容により戦前に所有していた財産のほとんどを失った人たちが多数いたようであるが、荒木家は幸いにも良い弁護士や白人の友人がいたお蔭で、土地や家はもちろん、車さえも失わずに済んだ。1952（昭和27）年に日本人移民にアメリカの市民権獲得の道が開かれると、荒木は試験を受けて翌年には晴れてアメリカ市民となった。アメリカに帰化するという荒木の長年の願いがようやくかなえられたのである。その一方で、シアトルの日系コミュニティの発展や日米の友好関係設立のために尽力したようだ。荒木の社会的な貢献や長年の花卉農家としての功労に対し、1972（昭和47）年に勲六等単光旭日章が授与された。叙勲は明治時代に創設された制度で、天皇の名において授与される。ヤマムラは*Discover Nikkei*への投稿記事、“Gifts from Japan”の中で勲章をつけた荒木の写真を掲載し、明

治生まれの祖父にとってはとても名誉なことであったにちがいないと書いている。

1975（昭和50）年10月の昭和天皇訪米の際には、荒木は天皇・皇后に敬意を表するために仲間とともにシアトルからサンフランシスコに行っている。その２ヶ月後、荒木はサウス・パークの自宅で心臓発作により89年の生涯を閉じている。ヤマムラは、心臓が弱っていたにもかかわらず、天皇に会いたい一心でサンフランシスコまで出かけた荒木の行動力に驚き、「なんという人生への情熱だろう、飽くなき好奇心と活力を*Jichan*は最後まで持ち続けたのだ」と述べている[33)]。荒木は勲六等単光旭日章を身につけて旅立ったそうである。その勲章は、20歳で単身渡米し、勤勉に努力を続けて成功を勝ち得た荒木の人生を象徴するものであった。

３．福井／日本の文化とアメリカ生活

荒木は70年近い年月をアメリカで過ごしたことになるが、福井／日本の文化や習慣は彼のアメリカ生活や三世代同居の荒木家ではどのように保持されていたのだろうか。

明治時代に福井県から渡米し、荒木は食べ物の違いにさぞかし困ったことだろうと推察していたが、ヤマムラによれば、彼はコーヒーやベーコンを好み、荒木家ではアメリカ風の朝食（ベーコン・エッグやソーセージ等）を自ら調理し、家族と楽しんで食べていたようだ。その上、アップルパイやワッフル作りも得意だった。荒木家の日常的な食事はアメリカ風であったが、シアトルには日本食材を扱う店があり、時々は日本風の食事をしていたらしい。実際、筆者がヤマムラの自宅に滞在していた時には、彼女はおかゆを作り、海苔の佃煮、かまぼこ、漬物を朝食に出してくれた。その際ヤマムラは「ご飯」「おかず」という日本語を使っており、聞いてみたところ、家庭内の言語は英語だったにもかかわらず、荒木家では副食を「おかず」と呼ぶ福井／日本の習慣が続けられていたことがわかった。また、荒木は日本の大根を栽培し、収穫すると干して漬物にしていたこともわかった。

ヤマムラの*Camp*には、子供の頃に家族でマツタケ狩りに出かけた思い出が語られている（77-83）。お茶やコーヒーを魔法瓶に入れ、梅干しの入ったおにぎりやチキン照り焼き等をお重に詰めて、車で出かける様子は、福井／日本の家族が行楽に出かける光景のようである。マツタケが採取できる場所は家庭内の秘密で対外的に口外禁止とされていたようだが、これも福井／日本でよく聞く話である。荒木家ではシアトル郊外の山々に出かけてマツタケを採取し、袋に一杯取れたマツタケをすき焼きに入れて堪能したようである。また、採取したマツタケは他の日本人家族にも配られた。アメリカの日本人コミュニティでも「おすそわけ」は行われていたのである。荒木はシアトルのパイク・プレイス・マーケットで売る野菜や果物のほかに、日本のかぼちゃや大根、梨を作って友人たちに分けていたようである。福井／日本の社会に見られる「おすそわけ」や「お返し」は、荒木家では周囲の人々との友好的なつきあいのための大事な行為だったのである。ヤマムラによると、荒木が作った野菜や果物は友人家族に大変喜

資料２
雛祭り（1941 年３月）
Susan Yamamura 氏提供

ばれたようだ。

荒木家ではマツタケ狩りと同様に、餅つきも大切な家族行事の一つであった。*Discover Nikkei*に掲載されたヤマムラの記事、“Mochitsuki”によると、荒木家では毎年クリスマスから正月までの間に、荒木の兄の家族も集まって餅つきをしていた。前日に水に浸しておいた餅米を蒸し、杵と臼を使って餅をつき、子供も参加してまるめ、お雑煮用の白餅や餡子餅、ヨモギ餅を作った。子供たちにとっては楽しい時間だったらしい。荒木は新年に向けて福井の実家と同じ方法で餅をつき、元旦には一家そろってお雑煮を食べていたのである。アメリカで暮らしていても日本と同様に新年を祝うことは、荒木にとって大事なことであったと思われる。

荒木は正月だけではなく、夏に日系コミュニティや仏教寺院で行なわれた盆踊りも大切な行事と考えていたようである。ヤマムラは子供の頃に浴衣を着て盆踊りに出かけるのが楽しみだったと述べている。また、1940（昭和15）年に初孫のヤマムラが誕生した時には、荒木は豪華な雛人形セットを日本から購入している[34]。物作りが得意だった荒木は雛壇用の棚を自ら製作し、赤い布を敷いて、雛人形や雛道具を飾った（資料２）。当時、雛壇飾りができた家庭は福井県においてはごく少数だったと思われ、雛人形の購入は孫娘の誕生の喜びだけではなく彼自身の成功を表すものであった。その後４年間、日米開戦と強制収容所収監のために雛人形や雛道具は箱にしまわれたままであったが、戦後荒木家では雛人形を飾り、雛祭りを祝ったようである。

荒木家は当時の日本の習慣に従って三世代で暮らしていた。三世のヤマムラは両親の方針で日本語を学ばずに育っており、荒木とは十分な会話ができなかったようであるが、子供の頃に荒木が歌ってくれた「鳩」や「桃太郎」は今でもよく覚えている。荒木がサウス・パークの自宅に八重桜やつつじを植え、藤棚を造り、池では鯉を育てていたことや、そうした日本的な風景が荒木に安らぎと楽しみを与えていたことも理解している。小さな子供だった頃、「*ombo*」[35]と言うと、荒木が膝を曲げてヤマムラの前に腰を下ろし、大きな背中におんぶしてくれたことを彼女は忘れてはいない（Yamamura 2014, 3）。ヤマムラは荒木から大きな愛情だけではなく、「明治時代の文化や価値観という贈り物」をもらったと述べている[36]。言葉で教えられることはなかったけれども、荒木と共に暮らすなかで福井／日本の文化や伝統を体験していたことに気づき、ヤマムラはその価値を認識したのである。

おわりに

本稿では、荒木仁作のシアトルでの人生をたどることで、19世紀末から20世紀初頭における

福井県出身者の北米地域への移住・移民の体験史の一端を明らかにすることを試みた。一世が北米地域に定住し始めてから約１世紀が経過し、アメリカでは四世、五世の時代になっている。荒木が伝えた餅つきや雛壇飾りの伝統はヤマムラ家では継承されておらず、南加福井県人会もすでに解散し、もう存在していないようである。しかし、日本人に対する差別が日常的に存在したアメリカで、一世たちが苦労の末に何とか安定した生活を手に入れたという歴史は世代を超えて継承されている。

ヤマムラは自身の人生の回想録、*Camp*を出版後も、荒木家のルーツをたどり家族の歴史を記録にまとめている。*Camp*及び*Discover Nikkei*へのヤマムラの記事は彼女を含む荒木家の生活の記録であり、記憶をつづる物語である。同時にそれは福井県から渡った荒木がいかにアメリカにホームを築き、アメリカン・ドリームを成し遂げたかを伝えている。ヤマムラは荒木から学んだことの一つとして「日本の遺産への誇り」を挙げているが（Yamamura 2014, 73）、非常に困難な状況において荒木を支え、より良い生活へと導いたのは福井県人であることの誇りと郷土愛であったことが彼の人生をたどることで見えてくる。南加福井県人会のある女性も、『五十年史』の中で、「日本人は、正直・勤勉・親切・人情味豊かな点等については世界一の国民で……特に福井県人は､五十年前の素質をそのまま保っております」と述べている（88）。この女性にとっても福井県人であることが苦しい移民生活の支えとなっていたのである。

荒木を含む福井県からの移民は福井県出身であることに誇りをもち、困難に耐えて頑張ることでアメリカ社会で生き残り、より良い生活を手に入れた。ヤマムラは筆者へのメールにおいて、祖父母と両親から学んだものとして「我慢（*gaman*）」を挙げ、「我慢（*gaman*）と頑張る（*ganbaru*）は私の『日本人らしさ』の一部であり、この価値観で生きてきた」と書いている[37)]。ヤマムラ家では餅つきなどの伝統行事は行われていないが、荒木が伝えた「我慢」の価値観は世代を超えて継承され、家族はそれぞれに安定した生活を送っている。ヤマムラは荒木が里帰りした際に持ち帰った越前竹人形[38)] を棚に飾って大事にしているが、その人形は荒木の福井県人としての誇りや我慢、及び郷土愛を象徴するものである（資料３）。福井県人の遺産は次の世代に確かに受け継がれている。

資料３
福井土産の越前竹人形
Susan Yamamura 氏提供

謝辞

本論の作成にあたり、福井県立大学附属図書館の楠井那美さんには文献収集等で大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

注

1）1894（明治 27）年に日本政府が出した移民保護規則では、移民とは「労働を目的として外国に渡航する者」と定義されている（イチオカ 1992, 56）。

2）高木（2005）は、永井環の伝記が日下部の通説を形成してきたとし、ラトガーズ大学で収集した当時の学則やカリキュラムに関する資料、グリフィス・コレクションで発見した日下部に関する新史料をもとに、彼の学生生活やアメリカでの交友関係、留学の具体的な目的等を論じている。

3）『五十年史』によると、田辺は三方郡久々子の出身で、1902（明治 35）年、18 歳の時に渡米し、ロサンゼルスで書店を経営した。

4）河原（2014）によると、カナダ太平洋鉄道のロジャー峠で、除雪作業中に雪崩により亡くなった 32 名の日本人労働者のうち３名が三方郡出身だった。最年少の 16 歳の今村武房は、1907（明治 40）年、傾いた家計を助けるために東京移民合資会社の契約移民に応募し、カナダに渡った。

5）河原（2014）によると、後藤は 1870（明治３）年に福井市館町で生まれ、1889（明治 22）年に渡米した。白人家庭でハウスボーイをしながら英語を習得し、アメリカの鉄道工事に日本人を斡旋する事務所に勤めた後、1906（明治 39）年にバンクーバーで日本からの契約移民をカナダの鉄道や鉱山に斡旋する日加用達会社を設立した。その後、移民を送出する東京移民合資会社と提携し、福井市にその支部を置いた。

6）ロサンゼルスの全米日系人博物館が主催するウェブ事業で、アメリカ、カナダ、ブラジルなどに移住・移民した日系人の文化や歴史、生活体験などをインターネットで相互共有し、つながりを深めることを目的としている。*Discover Nikkei* についてはホームページを参照のこと。<http://www.discovernikkei.org/en/journal/>

7）筆者は 2017 年３月 15 日～ 24 日にヤマムラの住むアリゾナ州ツーソンに滞在した。その際に彼女の祖父である荒木について話を聞くことができた。本論の作成に関してはヤマムラから承諾を得ており、作成中に生じた疑問点等はメールで問い合わせを行った。

8）明治元年のハワイ移民については、阪田（2002）や小川（2019）に詳しい。

9）正確には 1924 年移民法（Immigration Act of 1924）、またはジョンソン＝リード法（Johnson-Reed Act）である。この法律には「帰化不能の外国人」の入国を禁止するという条項が含まれており、1790 年の帰化法では市民権を取得する権利は白人とアフリカ生まれの黒人とその子孫に限られていた。中国人は別の法律（「中国人排斥法」1882 年）で移民が禁止されており、この移民法は日本人を対象とするものであった。「排日移民法」制定までのアメリカにおける排日感情の高まりについては、タカキ（1996, 178-191）、イチオカ（1992, 163-174）に詳しい。

10）カナダにおける排日運動や日本人移民の入国制限にかかわる法律制定については、原口（1978）を参照のこと。

11）『福井県統計書』は 1881（明治 14）年に創刊され、1953（昭和 28）年に名称が『福井県統計年鑑』となった。福井県の人口、経済、社会、文化などの各分野にわたる基礎的な統計資料が収録されている。『福井県統計年鑑デジタルアーカイブ』を参照のこと。

12）『福井県統計書』明治 33 年、「戸口」。

13）1898（明治 31）年以前については、『福井県統計書』では、「出入寄留人員」の欄で「外国行」として一括して人数が記載されている。たとえば、1896（明治 29）年は 82 人、1890（明治 23）年は 38 人であり、「外国行」の一番古い記録である 1886（明治 19）年は 20 人となっている。このうちの相当数がハワイやアメリカに渡ったのではないかと推察される。

14）広島県に本部を置く移民会社であるが、どのような経緯で出張所が耳村に置かれたのかは不明である。1903（明治 36）年当時の移民会社の一覧とその活動状況については、東郷（1906, 277）を参照のこと。

15）1902（明治 35）年に福井県小浜町で創刊され、主に三方郡を含む若狭地方で読まれていた新聞である。

1941（昭和 16）年に福井新聞が吸収合併した。

16）新聞広告には、「北米合衆国領布哇へ渡航御望の方は当所へ御申込相成候ば懇切に周旋すべし」とも書かれていた。資料 1 を参照のこと。

17）インターネット上にある計算機で、金額と年を入力すると過去のある年の金額が現在の貨幣価値ではいくらに相当するかを計算してくれる。説明には、「経済全体の物価変動を知るために作った計算機で、GDP と戦前企業物価指数を利用している」と書かれている。「日本円貨幣価値計算機」参照のこと。< https://yaruzou.net/hprice/hprice-calc.html>

18）記事の主見出しは「満州移住を志す者、二百家族に及ぶ」である。記事によると、この海外移住者の調査は拓務省の依頼を受けて県の社会課が行った。『福井県史 通史編６　近現代二』は、この記事を引用し、海外移住を出稼ぎのひとつの形態ととらえて福井県出身者の移住先、移住者の出身地を説明している（117-118）。

19）他に、南洋 11 人、フィリピン 37 人、支那 21 人、オーストラリア 1 人、キューバ 7 人、インド 3 人、ロシア（樺太）1 人、イギリス 2 人、となっている。全部を合計すると 1,531 人にしかならず、記事の「合計 1,541 人」という数字は間違いかもしれないと思われる。1932（昭和 7）年時点での福井県からの海外移住者は 1,500 人余りと見ておきたい。

20）アメリカ本土に限定した移民数に関する府県別の統計はないようである。「道府県別出移民累計（1899 ～ 1937 年）」（石川 1997, 126）によると、海外への移民数が多いのは広島、沖縄、熊本、福岡、山口、和歌山の 6 県であり、「在留国別在留者数（1909・1919・1929 年）」（石川 1997, 177）からは北米地域での在留者数が最も多いことがわかる。これらの資料から、アメリカ本土への移民も上記の 6 県が多いと推察される。

21）県人会については、坂口（2002, 46-48）に詳しい。

22）アメリカ本土やハワイへの上陸の際には感染症の検査があり、不合格者は日本に送還された。これを防ぐために、アメリカ領事館の計らいで乗船前にアメリカ人医師により検査を受けることになった。当時は特にトラホームが問題であった。鶴谷（1977, 94）を参照のこと。

23）海外渡航への関心の高まり、及び渡航に関する手引書や案内書、雑誌については、立川（1986）のほかに、鶴谷（1977, 53-56）、イチオカ（1992, 11-15）に詳しい。

24）荒木が新聞でアメリカの記事を読んだと思われるのは 1904（明治 37）年～ 1905（明治 38）年である。福井県の歴史に関する史料を有する福井県文書館に、この時期の『大阪朝日新聞』福井版の所蔵はなく、この時期の新聞として所蔵されている北日本新聞や若越新聞にはアメリカ渡航や移民に関する記事は見当たらなかった。

25）伊藤（1969, 60）によると、1902（明治 35）年当時、1 日の賃金は年季奉公を終えた一人前の大工で 65 銭、雑役人夫なら 35 銭だった。一方、アメリカでは鉄道工夫の 1 日の賃金は 80 セントから 1 ドルであった。これは日本円で 1 円 60 銭から 2 円に値した。

26）鉄道の移民労働者としては荒木は幸運だったのではないかと思われる。一世の体験談では、米が食べられることはほとんどなく、具の入っていない団子汁ばかりで栄養不足になり、夜盲症になったという話が多く語られている。例えば、鶴谷（1977, 130-131）、伊藤（1969, 370-378）。

27）移民の就労と請負業者の関係については、鶴谷（1977, 101-112）、イチオカ（1992, 65-92）に詳しい。

28）「日本円貨幣価値計算機」による。

29）荒木によると（伊藤 1969, 643）、当時レニア倶楽部では少なくとも他に 2 人の福井県出身者が働いていた。1 人はガードナー（月給 40 ドル）で、もう 1 人はバーテンダー（月給 45 ドル）だった。

30）当時ワシントン州では、法律により「帰化不能外国人」である日本人の土地の所有は禁止されていた。ヤマムラによると、信頼できる白人の助けを借りて荒木は土地を購入したようだ。のちに、この土地はアメリカ生まれの長男の名義となった。

31）ヤマムラによると、長男である彼女の父は８歳頃まで母方の祖父に預けられて日本で育った。両親の荒木夫婦が仕事で忙しく、子供の面倒を見る時間が十分に取れなかったことが理由のようである。荒木の次男は 1916（大正５）年に生まれたが、翌年に亡くなっている。1920（大正９）年に三男が誕生した。

32）真珠湾攻撃から強制収容所収監までの日系アメリカ人の体験については、例えば、以下の書籍に詳しい。タカキ（1996, 275-399）、ヨシコ・ウチダ『荒野に追われた人々』（1985, 76-267）、デビッド・A・ナイワート『ストロベリー・デイズ　日系アメリカ人強制収容の記憶』（2013, 129-234）。

33）*Discover Nikkei* へのヤマムラの投稿記事、“Gifts From Japan.”

34）*Discover Nikkei* へのヤマムラの投稿記事、“Dolls.”

35）荒木は「おんぶ」を「おんぼ（*ombo*）」と言っていたのかもしれないし、幼かったヤマムラには「おんぶ」が「おんぼ（*ombo*）」と聞こえたのかもしれない。

36）*Discover Nikkei* へのヤマムラの投稿記事、“Dolls.”

37）ヤマムラから筆者への 2018 年 11 月７日付けのメール。

38）竹から作られる人形で福井県を代表する工芸品のひとつである。

引用文献

石川友紀．1997.『日本移民の地理学的研究－沖縄・広島・山口－』，榕樹書林.

イチオカ，ユウジ．1992.『一世：黎明期アメリカ移民の物語り』，富田虎男・粂井輝子・篠田左多江訳，刀水書房.

伊藤一男．1969.『北米百年桜』，北米百年桜実行委員会.

ウチダ，ヨシコ．1985.『荒野に追われた人々』，波多野和夫訳，岩波書店.

小川真和子．2019.「「元年者」とハワイ：ハワイにおける日本人移民の始まりとその後」，『立命館言語文化研究』31（１）：3-16.

河原典史．2014.「カナダ・ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者：忘れられたカナダ日本移民史」，吉越昭久編『災害の地理学（立命館大学人文学企画叢書 02）』，文理閣，193-210.

坂口満宏．2002.「ネットワークでつながる日本人移民社会」，ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』，人文書院，37-68.

阪田安雄．2002.「太平洋を跨ぐ北アメリカへの移住」，ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』，人文書院，15-36.

タカキ，ロナルド．1996.『もう一つのアメリカン・ドリーム』，安部紀子・石松久幸訳，岩波書店.

高木不二．2005.「黎明期の日本人米国留学生：日下部太郎をめぐって」，『大妻女子大学紀要 . 文系』37：248-233.

立川健治．1986.「明治後半期の渡米熱―アメリカの流行」，『史林』69（3）：383-417．2020 年７月 25 日アクセス <https://repository.kulib.kyotou.ac.jp/dspace/bitstream/2433/238869/1/shirin_069_3_383.pdf>.

鶴谷寿．1977.『アメリカ西部開拓と日本人』，日本放送出版協会.

東郷実．1906.『日本殖民論』，文武堂．2020 年７月 25 日アクセス <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/800991>.

ナイワート，デビッド・A．2013.『ストロベリー・デイズ　日系アメリカ人強制収容の記憶』，ラッセル秀子訳，みすず書房.

永井環．1930.『新日本の先駆者　日下部太郎』，福井評論社.

南加福井県人会編．1953.『南加福井県人五十年史』，南加福井県人会.

原口邦紘．1978.「日本・カナダ関係の一考察－ルミュー協約改定問題－：日英関係の史的展開」，『国際政治』1978（58）：45-68．2020 年７月 11 日アクセス <https://www.jstage.jst.go.jp/article/kokusaiseiji1957/1978/58/1978_58_45/_article>.

『福井県統計年鑑デジタルアーカイブ』. 2020 年 7 月 23 ～ 25 日アクセス
<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/toukei-jouhou/archive.html>.
福井県三方郡役所編. 1916. 『福井県三方郡是』, 福井県三方郡役所.
福井市立郷土歴史博物館編. 1982. 『よみがえる心のかけ橋　日下部太郎 / W・E・グリフィス』, 福井市立郷土歴史博物館.
堀口久夫編. 1952. 『若狭の人物』, 若狭人発行所.
美浜町教育委員会編. 1972. 『三方郡誌（復刻版）』, 美浜町教育委員会文化財保護委員会.
美浜町史編纂委員会編. 2010. 『わかさ美浜町誌 ＜美浜の歴史＞ 第 1 巻 ふりかえる美浜』, 美浜町.
Yamamura, Susan . 2014. *Camp 1942 and the Rest of My Life*. SFJ Publishing.
_____. 2020. “Dolls,” *Discover Nikkei*. 2020 年 7 月 15 日アクセス
<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2020/6/11/dolls/>.
_____. 2020. “Gifts From Japan,” *Discover Nikkei*. 2020 年 9 月 17 日アクセス
<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2020/9/16/gifts-from-japan/>.
_____. 2020. “Mochitsuki,” *Discover Nikkei*. 2020 年 7 月 15 日アクセス
<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2020/7/13/mochitsuki/>.